＜特別寄稿＞

『八百比丘尼の話』

姜　信子

【前口上】

試みに女・旅・語り、と言葉を３つ並べてみれば、たとえば、こんな情景が浮びます。

雪の中を、笠をかぶって、杖をついて、うっすらと目明きの女の肩に手をのせて、三味線を背負った盲目の女がひとり、その後ろにももうひとり、やはり盲目の女が前の女の肩に手をのせて、三人の女がしんしんと歩いてゆく。

実際にその姿を見たことはありません、いつか見た、写真に残された越後の高田瞽女の旅の日々が、カセットテープで聴いた彼女らの唄声と合わさって、なぜか切なく懐かしく想い起こされるのです。

「母は信太へ帰るぞえ、母は信太へ帰るぞえ」

人間に化けて人間の男と縁を結んだ千年白狐「葛の葉」は、ある日うっかり狐の正体を現してしまい、もはやこれまでと畜生の世界へと戻ってゆく、たった七つの子を残して狐の棲み処の信太の森へと帰ってゆく、その子別れの場面のせつない言葉、この唄を聴くたびに、瞽女が訪ねた村々の女たちは涙したのだと、私たちはすっかり忘れてしまったけれども、かつて子というのはなかなか無事に健やかには育たなかったものなのだと、育った子との生き別れもそう珍しいことではなかったのだと、これも人伝て、文字の記録で知ったことで、それをわが身でひしひしと感じるには、私にはまだきっと旅が足りない。この唄に女たちが託した思い、唄を聴き物語を聴くひとりひとりの中に生れたそれぞれの「葛の葉」の物語をありありと感じ取るには、もっと旅が必要。

あるいは、こんな情景も浮かびます。

伊勢へと向かう山あいの道、旅人たちが、旅の女芸人たちとすれちがう。女たちは歌っている。

「夕べあしたの鐘の声　寂滅為楽と響けども　聞いて驚く人もなし　花は散りても春は咲く　鳥は古巣へ帰れども　行きて帰らぬ死出の旅」

これは確か映画「大菩薩峠」で見た１シーンです。女たちとすれ違うのは、市川雷蔵扮する机龍之介です。ただ、女たちが確かにこの歌をうたっていたのかどうか、私が記憶を書き換えたかもしれません。南無阿弥陀仏と唱えていただけかもしれない。この唄は「間（あい）の山（やま）節」といって、そもそもは伊勢の勧進巫女がうたっ

ていた歌念仏です。渺渺と風吹き埃舞う道をゆく遊行の女たちの歌。映画の中の女たちは若くて髪も長かったように記憶しているのですが、遊行の女たちの多くはきっと比丘尼姿であったり巫女だったり、かたわらには山伏がいたり、ただ歌うだけではなく、占いまじない祈祷をやったり、たとえばどこかの村の誰某の家で不幸がつづいて山伏が呼ばれる、山伏が何か祈祷の祭文を読み上げれば、連れだってやってきた傍らの比丘尼に神が降りる、神が言うことには、この家の庭の北の角の楠を切り倒しただろう、あの木は神の棲まう木だった、すぐにも神を祀って怒りを鎮めよ、祠を建てよ……、と、そんな風景をまるで見ていたかのように想像するのは、ここ数年の旅の賜物とも言えましょう。

とはいえ、この世には、旅をして骨身にしみて感じ取らないとわからないことが、まだまだたくさんある。

さて、「ここ数年の旅」と言いましたのは、「山椒太夫」ゆかりの地を日本各地、丹後由良・新潟・佐渡・津軽・福島と訪ね歩いた旅のこと。日本各地に安寿伝説があることの不思議に誘い出された旅でありました。

そうして歩いて歩いてじわじわと分かってきたことの一つを、ざっくりと言うならば、日本の風土の中に息づいていた無数の小さな神々、名もなき神々と「語り物」の関係や、その神々と関わりの深い民間の宗教者たちの存在がだんだん見えてきたということ。どうやら、かつて、人々の暮らしの中で、山伏修験や歌比丘尼、歩き巫女といった遊行の民の存在感は、いま私たちが思う以上に、いや、近代社会に生きる私たちには想像もできないくらい大きかったらしいと、だんだんいやでも気がつかされるのです。そこまでくれば、神と民と旅と語りの深い関係が、明治維新を境にすっぱりと断ち切られ、本当にアッという間に忘れ去られたという、恐ろしい事実にも気がつきます。

世俗の近代化と同時に、人間の手で「神々の近代化」をも敢行した明治の世、そのとき土地土地の、村々の、家々の無数の小さな神々とともにあった人々の記憶もまた、権力を持つ者たちにとっては使い途のない神々とともに処分されることになる。処分する側の言い分によれば、中央集権化された神々の秩序の中に納まらぬ「淫祠邪教」の始末ということでありましょう。

こうして、中心に権力を置くヒエラルキーとは無縁のところで、誰かの権威で裏付けられる本当も嘘もなく、ただ道に結ばれて、声に結ばれて、風土に育まれて、人と人の間に神々も記憶も物語も漂うように存在していた時代は瞬く間に遠い昔の話になったのでしょう。

なるほど、近代の始まりには、盛大な神殺しがあったのだな、それは記憶殺し、物語殺しでもあったのだな、と私は旅の空の下で、つくづくと思ったのでした。それが2016年のこと。そして、そのとき、私は、ここまでたどり着くのに20年近くもかかってしまったこと、それだけの旅が自分には必要だったということに茫然とし、愕然としてもいたのでした。

そう、ようやくここまでたどりついたとき、私は20年ほど前に森崎和江さん

からいただいた一冊の本、『海路残照』をふっと思い出して再読したのです。これは、人魚の肉を食べて不老長寿の運命を生きることになった「八百比丘尼」伝説を追いかけたものです。伝説を追う森崎さんは、椿咲く海辺を旅しながら、同時に産小屋はどこかと訪ね歩く。それは命に思いをめぐらし、命の源へとさかのぼる旅でもあり、明治以降の近代化された神々の下に封じ込められているものたちへと向かう旅でもある。命を孕む女という存在を愛おしんで想いつづける旅でもある。

この本をいただいたとき、私は森崎さんと共に北九州の海辺を歩き、海女の話を聞き、海辺の命の話を聞き、産小屋のことも聞き、近代が覆い隠したものを知るために記紀を読み直す勉強会をしているといった話まで聞いていました。でも、残念なことに、森崎さんがいったい何を私に伝えようとしていたのか、そのときの私にはわからなかった。そのことを2016年になって思い知ったのです。わかっていなかったということすら、2016年になるまでわからなかった。なにより、ここまでこなければ、『海路残照』に記された森崎さんの旅の意味をつかみとることもできなかったということに、私自身がひどく驚いたのでした。

この世には旅をしなければわからぬことが無数にある。本当に大切なことは、旅の先に待っている。長い旅をして、ようやく出会って、つながったときに、そのつながりは未来へと延びてゆくだけでなく、かつてはつながりそこねた過去にものびてゆくものなのでしょう。

2016年秋、『海路残照』を手に、八百比丘尼がそこで生まれ、長い長い旅の果てに遂に海辺の洞窟に入定したという伝説が語り伝えられている福井・若狭を旅しました。椿の杖をついて旅したという八百比丘尼の伝説あるところには、椿の花が咲きほころぶ、そこは必ずや明治以前は修験の修行する山であったりもする、そして、そのことをその土地の人びとのほとんどは既に忘れている。そうやって、森崎さんの歩いた跡をたどりつつ、自分なりのささやかな新たな気づきも重ねつつ旅したのちに、一片の物語を書きました。

題して「八百比丘尼の話」。

伝説を踏まえながらも、森崎さんに出会って、『海路残照』をいただいてからの20年の私の旅の足音が入り込んでしまったかのような物語です。これもまたこの世に数多あるさまざまな「八百比丘尼」伝説の一つとして聴いていただけたらと思っています。

そう、読むのではなく、このテクストは聴いてほしいのです。

いま、ここに置く「八百比丘の話」のテクストは、2017年1月7日に、実際に、「旅するカタリの夜」という場において上演されたものです。

浪曲師、祭文語りという、遊行の民の末裔の芸能者たちがその演じ手となりました。語りの声、三味線の音が開く異界には、地を這い、宙を舞う、語りの魂のようなナニカも現れた。

実際の舞台は、youtube にて「八百比丘尼の話@馬喰町 ART + EAT　by やたがらす組」で検索をかければ出てきます。

でも、その前に、どうぞ文字の間から立ちあがる語りの世界へ。

長い長い前口上となりました。いよいよ開演でございます。

八百比丘尼の話

作：姜信子
語り：玉川奈々福（浪曲師）
唄と三味線：渡部八太夫（祭文語り）
舞踊：堀川久子（舞踊手）

【唄】
赤い椿　白い椿　玉椿
たらあり　たらり　さまよう旅の細道に　したたる赤い　血の花が咲く

赤い椿　白い椿　玉椿
ゆらあり　ゆらり　ただよう旅の闇の世に　真っ白な　嘘とまことの花が咲く

赤い椿　白い椿　玉椿
ぼろうり　ぼろり　はてない旅の哀しみに　荒魂の玉の涙の花が咲く

赤い椿　白い椿　玉椿
くるうり　くるり　咲けば散ります　散れば咲く　めぐるこの世の花の歌

うた、ひとつ、たえだえに、きれぎれに聴こえる夜は、ほら、深い闇の彼方からなにかが道をやってくる。

みなさま、ようこそ、こんな闇夜の、こんな場末に、よくもまあ、お集まりくださいました。
物語さきわう場には人間ならぬ者どもも、声に呼ばれて姿を現すという、もしや、もうその先触れが舞い降りているやもしれません。

さてさて、これから語り申すは、人魚の肉を喰らった女の物語。女の名は、八百比丘尼という。「はっぴゃく」と書いて「やお」と読む。八百万の神々という時の、あの八百でございます。いったい、この八百比丘尼も、神々のような霊力を持つのでしょうか。

人魚の肉は神秘の肉、心がとろけるほどにうまいと申します、人魚の涙は心を惑

わす媚薬だと申します。海で人魚を捕まえた男たちは、ここぞとばかりに人魚の体をペロペロペロと舐めたものだといいます。

人魚と人間が関わったならば、いったいどんな災いが起こることやら……。

たとえば、こんな話もある。
それは、遠い昔、遥かな南の島でのこと。
ヌバリィという村のファナンという浜でひとりの男がしゃーしゃーしゃーと包丁を研いでいた。まな板の上には女がいた。女はじっと横たわっている。いや、それが女なのか男なのか、本当のところはわからない、なぜなら下半身は大きな尾ひれの人魚だから。
ところが、とかく世の人びとは、人魚と言えば、女にちがいないと決め込む。人魚というやつは、唄を歌っては人を惑わす、不吉な予言をころころと吐き出しては人を震え上がらせる、まことに悪い女だと、したり顔で申します、しかも、そういうことを考えなしに真っ先に言い出すのは、いつも、男。そうやって不穏も不吉も不義も不信も不浄も不貞も常ならぬものはすべて女のものとなる、世にもおそろしいものは、ばさりと斬り捨て、ずたずたに切り刻んで、血もしたたる肉にして、食ってしまえば、もう怖くない、そうだ、女など食ってしまえばいいのだ、食われれば悦ぶ肉が女なのだ、と、男は言う。

そのとき、まな板の上の人魚がおろろんおろろん、海鳴りの声で告げたのです。私は海底の竜宮の使いである、私をいますぐ海にもどしなさい、言うことを聞くなら、おまえの命ばかりは助けてやろう、驚いた男は咄嗟に包丁を放り捨てて、人魚をぐいぐいと海に沈める、暗い海底から人魚の声がうわあんうわんと響いてくる、「明朝、朝陽とともに、この世は大津波にのまれるだろう、この世は滅んで、やがてまたはじまるだろう、この世のはじまりを見たくば、いますぐ舟を出せ、おまえとともにはじまりを生きる命たちを舟に乗せて、この世の島々のいただきをめざしてゆけ」。男はどうやらは人魚の言うとおりに船出したようなのでした。その証拠に、男は一冊の「はじまりの書」を残した。たったひとりのはじまりの人となって、神のごとくに、この世の高みに降り立ったのだと、ぬけぬけうそぶく言葉を文字に記した。そう、ぬけぬけとね。まるで人魚などこの世には存在しなかったかのように。共に舟に乗った無数の命などなかったかのように。

あれからずっと海は、おろろん、おろろん、

（返してください、私の声を、
盗まないでください、私の記憶を、

閉じ込めないでください、私の命を、
その文字の中に）

男によって盗まれた「はじまり」を、もういちどはじめなおすために、何度でも、
人魚はまな板の上に身を横たえるでしょう、おろろん、おろろん、

たとえば、こんな話もある。
これもまた、遠い昔のお話。若狭の国のとある海辺でのことでした。ここにも、まな板の上に人魚がひとり。しかも、若狭の人魚はいったい何を思ったのか、男たちにみずからの料理法を教えるのである。そう、まな板の上の人魚が、おろろんおろろん、海鳴りの声で告げるのである。さあ、その出刃包丁を振りおろして、私の頭をストンと落としなさい。落とした頭はぐしゃりとつぶしてお出汁にすれば、美味しい海のおつゆ、命のつゆができあがるよ。柔らかなこの肉はすーっと三枚におろして、火で炙りなさい。フグ刺のように、さらさらと、透きとおるほどに薄く削いでいきなさい。そして、深い深い海の底から時を越えてやってきたこの私の命を、おまえたちの娘に食わせなさい、おまえたちの妻に食わせなさい、私の命を喰らった女たちはこの世の男どもが身震いするほどに美しくなりましょう、いつまでも若くありつづけましょう、そんな女を妻や娘に持つおまえたちはどれほど幸せであることか……、

人魚のとろける言葉を聞いた男どもはにたりと笑う、海の命を持ち帰る、やがて訪れる幸せを思えば、身も心も宙を舞う、男たちは素知らぬ顔で、娘に、妻に、海の命を食わせるのです。しかし、男というのは、なんと想像力に欠けた残酷な生き物だろうか、女たちはこうして永遠の呪いを身に受けるのです。永遠に死ぬことのない苦しみを生きることとなるのです。

人魚を食って永遠に死なない女、それが八百比丘尼です。
死なない女は、夫にも子供にも孫にも先立たれて、さびしい心で、この世をさまよいつづける。

なんという呪いでしょうか？

そうです、どっちに転んでも呪われている。
まな板の上の人魚を海に還せば、大津波がやってくる、嘘のようなはじまりがやってくる。
まな板の上の人魚を食ってしまえば、永遠の時にのみこまれる、
いつまでも終わらない。

なにゆえの呪いなのでしょうか？

ええ、ええ、何百年と旅を生きれば、時には身の毛もよだつことにも出くわします。東の海のミカンの花咲く島へと渡ったときには、それはもう驚いたものです。島のどこを歩いてもカタカタカタと足元から音がする。島の住人は何もしゃべらない、よそものには不信の目を向けるだけの無言の島だというのに、足元からはひっきりなしにカタカタカタ、乾いた音がする。それは、島の大地に埋められた髑髏（しゃれこうべ）たちの語りかける声だったのです。人間の骨のうち、大地に埋められて最後まで残るのが歯なのだといいます。歩けば、髑髏たちの白い歯がカタカタカタと、冷たい土の中に埋められたみずからの人生を語り出す。聞いてくれ、伝えてくれ、旅人よ。その昔、島では、島の旗をアカにするか、シロにするか、たったそれだけのことで争いが起きて、ついにはシロとアカの殺し合い、シロかアカか決めかねているだけでも殺されたのだと。そして生き残った者は何も話さなくなった、生き延びるために声を捨てた。ここでは、死んだ者たちだけがカタカタカタ、まるで生きているかのように饒舌な語りの声をあげる、聞いてくれ、伝えてくれ……。

永遠の旅の教え、ひとつ。
どうやら、この世には、縁もゆかりもない通りすがりの者だけが聞き取ることのできる声があるようなのです。

そう、こんなこともありました。
この世のはずれにそびえる山には、昔から、死者たちと、死者のために祈る者たちが集まるものでございます。西方の極楽浄土を願う者たち、生きる苦しみに世を捨てた者たちが生きながら山へとわけいってくるのです。そこにはナムアミダブツを唱えつづけるお坊様もいれば、オンアビラウンケンと真言を唱える山伏もおります。山伏のかたわらには神の依代となる比丘尼が付き従うものと決まっております。山伏・比丘尼にすがりつく悩める衆生もそこにはいる。そんな者たちがわらわらと寄り集まる、椿の花咲く山へと登った時のことでした。もう椿の季節も終わる春のこと。ぽとり、ぽとり、赤い椿、白い椿、玉のような椿が一面に落ちていた。近づいてよく見てみたのです。すると、赤い椿と思ったのは、なんと人間の舌ではないか。地面から直接ベロベロベロと舌が生え出ていたのです。私は、そのとき、初めて知りました。たとえ身は朽ちようとも、この世に思いを残した舌は腐らないのだと。人間の舌というのは、苦しみを味わうほどに、哀しみを舐めるほどに強くなるのだと。

死者の国、この世のはずれの山には、無数の赤い舌。死んでもなお、切ない声で果てしなくみずからの命を語りつづける舌に、ベロベロベロと椿の山も揺れるようです、赤い舌の先からつぎつぎと、音もなく花が咲くようです、桜の花、蓮華の花、赤い椿、白い椿、玉椿、風に吹かれて、ゆらりゆらり。

永遠の旅の教え、またひとつ。
この世のはずれの山々には、言うに言われぬ思いの花々が咲く。

ベロベロと語りやまない赤い舌の、その地面の下には、朽ちてゆく無数の命の、血と肉と骨がある、肉体は土となり、水となります、水は山にしみいり、やがて川になって、とうとうと海に流れ込む、こうしてすべては海に還ってゆく、人魚がやってきたあの海へ。

でもね、海と山と命の、水のようにめぐる流れのそのなかに、私たちの物語のすべてがあることを、どうしたことか、私たちはすっかり忘れ果ててしまいましたね。

めぐる流れをばっさりと断ち切って、私たちの声を封じて、私たちの物語を盗みとってゆく者どもがこの世にはいるのですね。

大津波に何度洗われても、この世には、つながる先などどこにもない、真っ白な嘘ばかり。
これでははじまりようもない。

私は、若狭の国の八百比丘尼でございます。人魚の肉を食べた女です。永遠を生きる者です。そして、なにより、私は声を聴く者です。

永遠の旅が教えてくれた一番大切なこと。
それは、この世にうごめく無数の声を無心に聴くことこそが、呪いを祈りにかえるただ一つの方法だということ。

しかし、大変無念なことでした。不意に、命をめぐる私の永遠の旅は、断ち切られたのです。百五十年前、文明開化の音とともに。
私が聴きつづけてきた無数の声は、文明の光の中で見失われました、文明の言葉

に書き換えられました、私自身もまた、文明の文字で口を塞がれた。あとに残されたのは、もはや私のものではなくなった八百比丘尼の伝説。

声は聞かれなければならないのです、
物語は取り戻されなければならないのです。

今日ここで出会ったあなたに、お願いがあります。
どうか私の名前を大きな声で呼んでください。私をこの世に呼び戻してください。よみがえった私は、命をかけてこの世に蠢く声を聴くでしょう、無数の声を私の喉に宿らせるでしょう、無数の声が私の喉で渦を巻けば、私は息ができなくなるでしょう、だから、あなたにお願いです、剃刀で私の喉を切り裂いてくれませんか、パックリとね。そこからヒューッと風が吹き抜ける、ほとばしる私の赤い血を浴びて、声たちは息を吹き返す、私はこの世の風穴になる、声になる、物語になる。物語る私の舌の先から、赤い椿白い椿玉椿、咲けば散ります、散れば咲く、めぐるこの世の命の歌。

（きょう・のぶこ／かん・しんじゃ　作家）